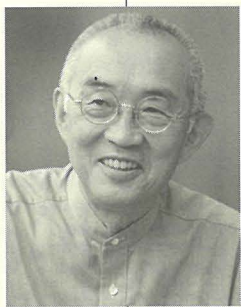


大地の記録に存在する真実



東京大学名誉教授
つきお よしお
月尾嘉男

昭和十七年（一九四二年）、愛知県生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学工学部教授、東京大学工学部教授、同大学院新領域創成科学研究科教授などを経て、平成十五年、東京大学名誉教授。「未来フロンティア紀行」（北海道建設新聞社）、「ヤオヨロズ日本の潜在力」（講談社）、「縮小文明の展望」（東京大学出版会）など著書多数。

津波にびくともしない自然
青森から宮城にかけて数百キロメートルにもなる三陸海岸は名勝の連続する日本最大のリアス式海岸で、沖合をカヤックで何度も通過したことがある。その関係で、多数の友人が沿岸に生活しており、四月中旬に数日ではあるが、見舞いのために訪問した。報道映像では伝達されない臭気や粉塵が充満しており、惨状は

想像以上であったが、さらにマスマディアではほとんど報道されない、二点の重要なことを発見した。
宮古の田老地区は昭和三陸津波の直後から「田老の万里の長城」と揶揄されるほどの長大な堤防を、戦時中断はあったものの、四五年間と

いう歳月をかけて構築してきた。一九六〇年五月二四日襲来のチリ津波は完全に防壁し、世界に有名になったが、今回は堤防の何倍もの高さの津波が襲来し、堤防の内側は完全な荒野になった。友人の家屋も土台だけになっていたが、その友人が「三

王岩」が無事かどうか心配だということで確認に出掛けた。

漁港の外側の海中に屹立する三個の巨岩で、中央の男岩は細長い石柱であるが、正面からの津波にもかかわらず、以前のままの勇姿であった。さらに海岸を南下すると国指定天然記念物の「蠟燭岩」がある。高さ四〇メートル、上部は幅七メートル、下部は幅三メートルという脆弱な形状であるが、これも無事であった。この石柱より低層の一見堅固な建物が各地で破壊された現実、人工は自然に対抗できないことを明示していた。

健在であった神社仏閣

田老の堤防の頂部から集落を見渡すと、手前は市街の跡形もない荒野であるが、集落の端部にある寺院は無傷であり、それより上部の家々も無事という光景であった。寺院は津波の到達限界に建立されていたのである。それ以後、各地の被災現場で観察してみると、ほとんどの寺院や神社や鳥居が以前のまま残存していた。それ以前の津波での流失の経験

から、高台に移設したのかもしれないが、とにかく大半が無事であった。

さらに驚異の事実があった。宮古の港湾の出口に龍神崎という岩山があり、その足元の岩礁に地元では「龍神様」といわれる神社と鳥居がある。岩礁は海面より約二メートルでしかなく、当然、津波ははるか上方を通過していったはずである。しかし、津波の直後に友人が撮影した写真には、いつもカヤックで洋上から参拝していたままの神社と鳥居が存在していた。神仏の靈験とか奇跡としか表現できないが、驚異の現実である。

抹殺してはいけない文化の記憶

やや冷静になれば、何れもの津波の経験から安全な場所が選定されただけかもしれないが、その経験が神社仏閣の位置として大地に記録されてきたのである。それらの経験の最大の蓄積は地名である。仙台市若林区の海岸から約六キロメートルの地点に「浪分神社」がある。ここまで慶長津波が到達して二方に分岐したことを記録した神社である。しかし、名前の意味は忘却され、そこから海

岸までの低地に発展してきた市街は今回全滅した。

明治、昭和、平成の市町村大合併は大地に記録された地名を大量に消滅させた一方、意味のない地名を各地に誕生させた。秋田県大仙市は偉大な仙人が存在したわけではなく、大曲と仙北の合併で登場した名前である。さらに郵便配達の利便のために町名の統合が推進された。東京の六本木一丁目は五町を合併した地域であり、その一部の旧名は麻布谷町で、地形を表現していたが、豪雨で冠水するときのみ、意味が浮上することになった。

今回の地震と津波が明確にした第一は、文明という名前に集約される技術が社会を便利に快適にしたことは事実であるが、所詮、偉大な自然には対抗できないことである。第二は、それぞれの地域で神社仏閣の位置や地名として大地に記録されてきた文化の蓄積は抹消されたり忘却されてはいけないことである。文明を後退させる必要はないが、棄却された文化に蓄積されてきた重要な情報を回復する努力をする時代である。